2011デュッセルドルフ日本人学校　校長室通信　11月8日号　文責　黒木

てとてとて

～親と子どもと教師とがしっかりと手をつないで共に成長していきましょう～

人は読んだ本の数だけ幸せになれる！

本の主人公と一緒になってハラハラドキドキする。世の中にはこんな世界があるのか。他の人はこんなふうに考えるのか。本でのいろいろな出会いを通して、他者への想像力を広げ、将来を生きる自分づくりにつなげる。これができるのが読書の魅力だと思います。しかし、ボタン一つで楽しめるゲームなどメディアの楽しみがいろいろある中で、子どもたちに読書の魅力や醍醐味を気付かせることはそう簡単ではないと思います。自分で繰り広げる想像世界の楽しさを知らない子どもは本に手を出そうとはしません。読書の面白さを伝える学校や家庭の役割が重要だと思います。

１０月18日（火）から21日（金）までの4日間、絵本やパネル、人形劇などを使いながら日本クラブ図書部の読み聞かせ会の方々に読み聞かせを行っていただきました。読書は、私たちの人生をより豊かにするだけではなく、感性を磨き表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠かすことのできないものだと思います。子どもたちは、読み聞かせ会を通して「読書は夢への架け橋である」ことを体験できたと思います。

日本クラブ図書部の読み聞かせ会の方々、誠にありがとうございました。

右は、前回の通信でもご紹介した相田みつをさんの言葉です。この言葉の前では、親や教師の誰でもが真摯な気持ちになるのではないでしょうか。

子育てに対して、「どうして？なぜ？こんなはずじゃなかったのに・・・。」と、子どもの言動に疑問や悩みを持つ時、右の言葉は、子どものせいにしている自分に「喝」をいれてくれます。親や教師は、常に自分の生き方や考え方の良いところや悪いところが子どもに反映されて育っていくということを肝に銘じておく必要があります。

この言葉どおり、子どもは親が育てたように育っていきます。そして、学級や学年や授業も、担当の教師が育てたように育っていくものです。時には教師や親に反抗的な態度をとるようになる子どもたちですが、思春期の真っただ中にある時期が「子育て」の正念場です！

学校と家庭と子どもたちと一体となって、「手と手と手」を取り合いながら一人前の人間に育てていきましょう。

１１月１４日（月）から、参観週間が始まります。

子どもたちのために有難く使わせていただきます ありがとうございました

寄付額
金、弐千参百オイロ　也

右の通り
贈呈いたします

二〇一一年十一月三日
二〇一一年度父母会
会長　今井恭恵子

デュッセルドルフ日本人学校
学校長　黒木広充様

目録

11月3日（木）に行われた父母会全体委員会で本年度学校祭の収益金から、2.300ユーロをいただきました。父母会の皆様に心からお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。子どもたちのために有効に使わせていただきます。

また、イタリアの自転車メーカGIOSからも600ユーロの寄付金を10月下旬にいただきましたので、ご報告させていただきます。